

安倍能成と朝鮮

－矛盾と逃避の間で－

金 光 一

はじめに

夏目漱石の門下生でもある安倍能成（1883 - 1966）は、第一高等学校と東京帝国大学を卒業し、その後、京城帝国大学の教授、第一高等学校長、文部大臣、貴族院議員、憲法改正特別委員長、帝室博物館長、学習院長を次々と歴任するなど、学問および教育にその生涯を捧げた人物である。

ここで注目したいのは、1926年に安倍能成が京城帝国大学の教授として就任し、自分の母校である第一高等学校長として転出する1940年まで朝鮮に滞在したことである。

安倍能成が滞在していた当時の朝鮮は、日本による植民地支配や、急速な近代化により、目まぐるしい変貌を遂げていたが、その中で安倍能成は京城帝国大学の教授という立場から生じる矛盾を抱えたまま、日本による朝鮮の植民地支配の方向性への疑問を抱きながら約15年を朝鮮に滞在したのである。そして、植民地支配を受けていた朝鮮という現実から逃避するため、現実から一歩離れて朝鮮を観察し、それらを随筆風を書くという道を選択した。それらの随筆の中では、朝鮮の自然や風俗、文化などについて淡々と述べられている¹。

当時の日本は、朝鮮と朝鮮文化を遅れたものと見る見解が支配的であった²。日清戦争や日露戦争での勝利に伴い、すでに日本の一部になりつつあった朝鮮を体系的に知る必要に迫られていた明治政府は、植民地経営に必要な知識や情報を得るため、アジア大陸への進出を積極的に奨励した。その結果、朝鮮へ旅行する日本人が急増するようになっただけでなく、その体験をまとめた旅行記や見聞記なども多数顕われるようになった³が、それらの旅行記や見聞記には、いわゆる「劣ったアジアに対する優れた日本」を強調するものが多⁴とされている。

その中で安倍能成は、朝鮮の自然や風俗、文化などを理解しようとしただけでなく、朝鮮文化を長い伝統を持つ一つの優れた文化として高く評価したのである。さらに朝鮮文化を〈古くて遅れたもの〉ではなく、〈守るべきもの〉として捉えていた安倍能成の姿勢は、近代のみならず、現代にも示唆するところが大きいと考えられる。

本稿では、安倍能成が朝鮮に滞在していた前後の日本と朝鮮の背景を踏まえながら、一人の教育者でありながら植民地支配者側の立場にあった安倍能成が、朝鮮滞在期にどのような葛藤や矛盾を抱えていたのか、またどのような姿勢や態度をもって朝鮮を捉えていたのかを明らかにすることを目的とする。

I. 矛盾を抱えていた安倍能成

1. 安倍能成と京城帝国大学

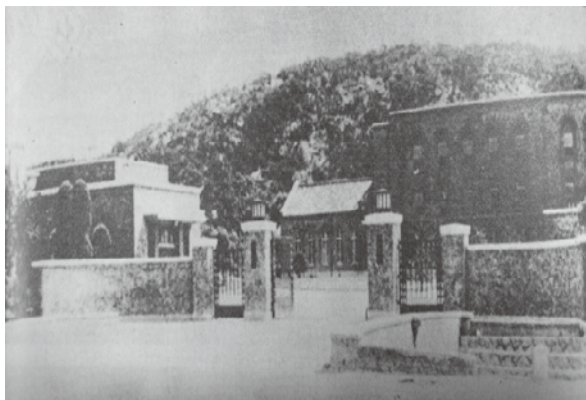
安倍能成は1926年から1945年までの約15年間、京城帝国大学の法文学部の西洋哲学教師として朝鮮に滞在した。

この京城帝国大学は、1919年の3・1独立運動を境に、武断統治から文化統治へと日本の植民地政策が変化したこと、朝鮮併合の正当性と植民統治の必然性を学術的に裏付けるための研究者と研究機関に対する需要、朝鮮という植民地の開拓のための人材確保、朝鮮に滞在する日本人の高等教育の要求など、様々な要因が複雑に絡み合って設立⁵された。すなわち、京城帝国大学は朝鮮人の教育のためにはなく、主に植民地支配をより堅固なものにするために設立されたのであるが、安倍能成はこの京城帝国大学の教授として、約15年という長い時間を朝鮮に滞在しながら、朝鮮全般を自らの目で観察したのである。

まず、安倍能成が植民地支配と密接な関連のある京城帝国大学をどのように見ていたかを、次の

文を通して見てみよう。

京城帝国大学は一個独特の使命を有する独立の大学である。それは内地大学の出張店ではない。思ふに当局者がこの大学を設けた主意も、断じて半島の子弟を喜ばずに大学の空名を以てするにあつたのではない。我々はこの意味に於て情実と方便とを出来るだけ排して大学の本領に向つて進まねばならない。我々は固より質実を尊び贅沢を排するけれども、この大学の実を挙げる為に必要なる編成や設備に至っては之を求めなければならない。さうして差向き大学予科の二年制の如きは早晚三年制に改められることを希望せざるを得ない。(中略) 京城は京城として、新しき文化を容るゝと共に独特の文化を發揮すべきこと、尚京城大学がその独特の使命を充すべきことと同じであらう。京城帝国大学は自ら軽んじてはならない。同時に偏狭なる学閥根性に捕はれてならない。大学を形造るものは遂に人である。我々是我々の後にこの大学を形造る人々が、我々を辱める程のより勝れた人々であらんことを祈る。さうしてかゝる人々は唯に之を京城大学のみ求めずして、広く天下の学府に求めねばならぬ。自分で自分を狭くするものは成長しない。我々がこの大学の将来の為に自ら戒め、又半島人士の注意を請ふべき点は実にここにある⁶。



【図1】京城帝国大学法文学部の校舎と正門⁷

このように、安倍能成は日本による朝鮮の植民地支配と密接に関わっていた京城帝国大学を意識はしているものの、京城帝国大学は内地大学の出張点ではなく、独特の使命を有する独立の学問研

究の場として存在しなければならないと強調した。

実際、安倍能成は京城帝国大学の中で何より学問を重視しようとしていた。李忠雨らの『(再び見る) 京城帝国大学』によれば、1934年から京城帝国大学の予科が2年制から3年制に変わることになったが、それに対して安倍能成は、大学とは単純に知識の詰め込み中心の場ではなく、人格と情緒を育む教育の場であるため、予科を1年延長したことの意味は非常に大きいと述べたとされる⁸。武断統治から文化統治へ植民地政策の変更に伴い、表面的には日本人と朝鮮人の同一の教育を標榜していたものの、実際は可能な限り朝鮮人への教育を抑えようとした当時の教育状況での発言であることを考えれば、安倍能成がいかに京城帝国大学を独立した教育の場として認識していたかがうかがえるだろう。

また、講義の時間割は学生のためのものであり、大学(教務課)の權威を守るために作られたものではないと述べ、一人の朝鮮人学生の都合に合わせて時間割を修正した⁹ことや、機会があるたびに朝鮮人の優秀性を強調したこと、日本と朝鮮の服装や囲碁の打ち方などを比較し、日本文化の不合理的な点を言及¹⁰するなど、京城帝国大学の日本人と朝鮮人の学生に対し、可能な限り差別をしないようにしていたと知られている。このような安倍能成の姿勢や態度は、京城帝国大学の日本人教授にもかわらず、そして安倍能成の講義も名講義であったため、朝鮮人の学生の中に人気を集めた¹¹のである。

その一方、安倍能成は朝鮮の京城帝国大学において、真の教育を行うことの難しさも気づいていた。真の教育とは対話を以て成し遂げられると言及¹²していた安倍能成であったが、帰国後には以下のように述べている。

私は京城帝国大学では西洋哲学を講じたが、私の学問的天分と勉強との不足のために、学問上では啓蒙的以上に深い影響を与へることができなかつた。(中略) 私は大学生以外に広く交を朝鮮の人士に求めることはしなかつたが、偶然の機会に与へられた民衆との淡い接触には、却て人間的な愉快なものも数々あつた¹³。

このように安倍能成は、朝鮮人との淡い接触はあったものの、自ら植民地の朝鮮の人々に積極的に働きかけることはせず、京城帝国大学という制限されていた場における教育者にとどまっていたことを自ら認めている。それだけでなく、前述したように、京城帝国大学の設立が決して朝鮮人の教育のためにはなく、より効率的な植民地支配のためであったため、植民地支配と密接に関連する京城帝国大学の教授という立場に立っていた安倍能成が、日本による朝鮮の植民地支配を正面から否定することは決して容易ではなかったに違いないだろう。

2. 安倍能成の矛盾

前述したように、京城帝国大学の教授、すなわち一人の教育者であると同時に、植民地支配者側の立場に立たされていた安倍能成は、朝鮮に滞在した約15年、常に葛藤や矛盾を抱えていたといえる。

私は今朝鮮の学校一教授として朝鮮の仕事の一部分を負担せる当事者であることを強く意識して居る。この意識に喜びと誇りが一つもないとはいはないが、しかし苦しみと恥の方が多。私は当事者としての努力の生活、当為に催促せられる生活の他面に、旅人としての観ずる生活に、私の解放を求めずにはゐられない¹⁴。

このように、安倍能成は植民地朝鮮の京城帝国大学の教授として、苦しみと恥を感じていると言及しながら、京城帝国大学で教育を担当することもまた植民地支配に一助することになるということすら自ら十分認識していたのである。

また、安倍能成が矛盾を抱えるようになった最も大きな原因は、日本による植民地支配の方針と、彼の考えていた植民地支配の政策の間に大きなギャップがあったことによるものであると考えられる。では、安倍能成は朝鮮総督府による植民地支配をどのように眺めていたのかを見よう。

日華事変の起る前後から、総督府はめだつて高圧的強制的同化の方針をとり、神社の礼拝を強ひたり、人名地名を日本化したり、白衣に墨

を塗ったり、外国人、外国語、キリスト教を排斥もしくは拘束したり、食糧や労働力の日本輸出その他にも無理に無理を重ね、人心離反の徴は己にかなり顕著であった。当時今まで普通学校と呼ばれたのを国民学校、高等普通学校と呼ばれたのを中学校と、内地学校の名に変えたといふ内容以外には殆ど何物もない朝鮮教育令の改正を以て、内鮮教育の画期的統一なれりと声明し、南山の朝鮮神宮祠畔に記念碑を立てたのは、李朝時代の暴戻な地方官が「永世不忘の碑」を立てさせて百姓に感謝を強ひたと同じことであり、明かに末期政治の代表的表現であった。昭和十五年の秋、私が母校一高の招きに応じて帰京した時には、さういふ施政に耐へられぬという気持ちもあった。〈中略〉さうしてそれをかういふ政治的条件の下に朝鮮人と共に凌いでいくことは出来ないと感じた。私は心中に逃避の念を抱いて朝鮮を去ったのは本当であった¹⁵。

安倍能成がこのように述べていることからわかるように、1930年代の植民地支配は日本人から見ても耐え難い政策が施行されていた。1931年に勃発した満州事変を皮切りに、戦争の拡大を図っていた日本は、1937年の日中戦争に伴い、朝鮮を戦争の踏み台にするため、植民地朝鮮に対する支配や統制をより強めていった。朝鮮総督府は朝鮮人の「皇国臣民化」を最大の政策課題に設定し、様々な皇臣化政策を相次いで実施していくことになる。

1937年以降は、ほぼ毎日神社参拝が強要され、また皇国臣民としての朝鮮人の自覚を促す「皇国臣民の誓詞」が定められ、学校では毎日子どもたちに唱えさせた¹⁶。1938年には、「国体明徴」「内鮮一体」「忍苦鍛錬」を三大教育方針とする第三次朝鮮教育令が施行され、日本と同様に朝鮮にも小学校令、中学校令、高等女学校令が施行された。従来の普通学校、高等普通学校、女子普通学校は、それぞれ小学校、中学校、高等女学校へと学校名称が統一されることになった¹⁷が、日本人と朝鮮人は同一の教育機会を与えられることはなく、学校の設立主体、経費負担、そして日朝生徒の収容に至るまでなんら変わるところはなかった¹⁸。

また、それまで必須科目であった〈朝鮮語〉は随意科目となり、実質的に朝鮮語はほとんど教えられないことがなくなった¹⁹だけでなく、それに伴い、1940年には朝鮮語紙の『東亜日報』と『朝鮮日報』も総督府によって廃刊させられることになる²⁰。

1938年の「陸軍特別志願兵制度」に続き、1944年には「徴兵制度」が始まり、多くの朝鮮人が軍要員、軍隊性奴隷等として動員され、日本の戦場で殺される一方、日本国内の労働力不足を補うために、朝鮮人を日本国内にも強制的に連行してきた²¹。

1940年には、改正された朝鮮民事令とそれに付随する諸法令が施行され、朝鮮人の姓名を日本風の姓名にする創氏改名が実施された。その結果、約80%の朝鮮人が創氏の届出を出²²し、皇民化政策の犠牲になった。創氏改名の真のねらいは、朝鮮的な家族制度、特に父系血統にもとづく宗族集団の力を弱め、日本的なイエ制度を導入して天皇への忠誠心を植え付けることであったのである²³。

このような1930年代の朝鮮で、安倍能成は「内鮮一体」のスローガンの下で行われていた強圧的な植民地支配の実態を見て、日本による朝鮮の植民地支配の方向性について疑問を抱くようになったのである。そして安倍能成は、日本による強圧的な植民地支配に耐えられないと言及しながら、そのような強圧的な政策を強行することは、朝鮮人の日本に対する増悪感をより一層強める結果につながると考えていたに違いない。

とはいえ、それは安倍能成が日本による植民地支配に抵抗していたという意味ではない。強いて言えば、安倍能成は日本による植民地支配には同調していた。安倍能成は、常に日本と朝鮮を同等な関係として捉えていたのではなく、前者を上、後者を下に位置づけ、「内鮮融和」を現在及び未来の重大な課題として捉えていたことが、次の文から読み取れる。

尤もこれも朝鮮の併合が朝鮮人を幸福にする為であって、一つも我国の為でないならば、その一つの目的を達したものであって、まことに結構なことである。けれども朝鮮の併合が我国の東洋に於ける地位確保の為であり、それが朝

鮮人をも結局に於いて幸福にするといふ、包容力ある利己主義たるを期するものであることは、偽善者でなければ誰人も認める所である。朝鮮人が勢力を占めようが内地人が勢力を占めようが、等しく天皇の赤子として大日本帝国国民の一人として一向問題にならない位、内鮮が完全に融和することは理想であるが、それは決して二十五年や三十年で期待し得られることでなく、百年二百年経っても実現し難いことである。内地人は朝鮮人をも天皇の赤子として大日本国民として見ると共に、あくまでも朝鮮人の兄としての地位を維持しなければ、現在に於いて又近き将来に於いて内鮮融和は期待せられるものではない²⁴。

つまり、安倍能成は日本による朝鮮の併合は結果的には朝鮮人を幸福にするためのものとして捉えており、「兄」である日本が、「弟」である朝鮮を導かねばならないと主張していたのである。また、安倍能成は文化的な側面においても、実質的な「内鮮融和」を目指していた。

朝鮮がすでに日本国である以上、従ってその内鮮融和を本当に実質的なものにする為には、朝鮮文化の将来も、文化の先進者なる内地人の指導に待つ外はなく、又それが最も便利である。内地人が西洋文化を今の程度にものにするまでの七十年の努力は、公平に考へても相当にすばらしいものである。朝鮮の人々は色々不足をいつて居るが、朝鮮の文化が今日までに進んだのは、やはり主として内地人の力によるのである。朝鮮人中の特殊な傑出した専門的研究者が、本源的に西洋の源泉から西洋文化を学ぶといふことは、固より結構であるが、一般的には内地人のものにした文化を土台にして、内地人と共に文化の永き建設に従事するといふことが、必然の勢であり又現下の急務である²⁵。

このように、安倍能成は文化的な面でも、朝鮮を日本の一部として捉え、西洋文化を朝鮮よりも先に受け入れ、自分のものにしていく日本が常に朝鮮を指導する必要がある、また朝鮮の文化が進んだのはすべて内地人の力によるものであると言

及し、日本を朝鮮の上に位置づけていたのである。「兄」の日本、「弟」の朝鮮という安倍能成の考え方は、それ以外の様々なところでも見られており、安倍能成が植民地支配の基本理念である「内鮮融和」に同調していたことが見て取れる。そして、朝鮮人が内地人と共に日本の皇室を上に頂ける日本帝国の臣民となることに抗拒する場合は、それに対して決して容赦すべきではないと強く主張²⁶し、朝鮮の人々の反発を警戒していたのである。

しかしながら、前述したように、安倍能成が描いていた「内鮮融和」は、前で言及したような朝鮮総督府の方針とは異なるものであった。安倍能成は日本と朝鮮の完全なる合併、すなわち「内鮮融和」を一つの理想として考えていながらも、真の「内鮮融和」には長い時間と互いへの理解が不可欠であると考えており、強制的な方法だけでは、到底「内鮮融和」は叶いそうにないと認識していた。そのため、安倍能成は単に一方的に上から押しつけるような朝鮮総督府の植民地支配の政策に大きな疑問を抱くことになったのである。

Ⅱ．逃避から獲得したもの

1. 安倍能成の選択した道

前述したように、京城帝国大学の教授という立場から生じる矛盾と、植民地支配への方向性の疑問に悩まされた安倍能成は、己が己で居られるため、あるいは植民地支配を受けている朝鮮という現実から逃避するためか、朝鮮を「観の世界」を通して眺めることにする。

然り、旅の世界は遂に行の世界ではなくて観の世界である。私はこの観の世界に闖入してその静謐と純粹とをかきまぜる行のわづらはしさを好まぬ故に、一人旅を好むのである。行はわれを執って人や物に働きかけてゆかうとする、観は我を空しうして人や物を受けようとする²⁷。

上の文にも示されているように、安倍能成は朝鮮の人や物に働きかける「行の世界」から一步離れ、朝鮮を一つの旅先として捉える一人の〈旅人〉の立場から眺める「観の世界」を追及し、朝鮮に滞在していた約15年、常にその姿勢を貫いた。

つまり、朝鮮滞在期の安倍能成は人や物に働きかけようとしたのではなく、心を空しくして当時の朝鮮を静かに眺めていたのである。

そして、西洋哲学を専攻した安倍能成にとって、己の研究を進めていくには、朝鮮という地は決して適した場所とはいえなかったこともあり、自らの目を通して朝鮮で見たものや経験したことなどを随筆風に著わし、それらを綴って6冊の随筆集²⁸を残している。それらの随筆は、単に朝鮮のみならず、中国や日本、ヨーロッパ諸国の自然、文化、交流関係、書物への感想などを主な内容としている。

しかし、安倍能成が朝鮮の人々や物に働きかける「行の世界」ではなく、主に旅人としての観ずる生活、つまり「観の世界」に己の解放を求めたのは、結局、植民地朝鮮において「内鮮融和」のスローガンの下で行われていた強圧的な植民地支配の実態と、その現実から逃避するためにはないかと捉えることができるだろう。これに関しては、以下の内容からも読み取れる。

私の随筆的文章の殆ど総ては、学会に問題を提供するものでも、社会問題を論ずるものでも、世間を教化するものでも、又青年男女の血を沸き立たせるものでも、大衆に訴へるものでもなく、大方は自分一個の心持や想ひ出を陳べたり、自然に対する印象を記したり、街頭の見聞を叙したり、友人故旧を語ったり、偶々批評めいたことをいへば多く書物批評の範囲を出でず、論議を試みれば、眼前の急務でもない風景の破壊を慨く位のかい(、)しょ(、)しかない。結局私の書くものは大体皆プライベート・ペーパーズ(私記)に止まるのであるから、元来の性質上相手の強い手答や感激を要求してはいない²⁹。

このように、安倍能成の随筆の中で、朝鮮に触れた対象は朝鮮の自然や文化などに限られ、植民地支配などの社会問題や政治問題に関連する言及はほとんど見られないことから、植民地支配が行われていた当時の時代状況から安倍能成は決して自由でなかったことがうかがえる。

2. 逃避がもたらしたもの

一方、「観の世界」を追求したからこそ、安倍能成は近代の朝鮮をより客観かつ相対的に眺め、朝鮮の自然や風俗、文化などを高く評価することができたともいえるのではないだろうか。

私は朝鮮でも有数な形勝の地京城に住んで、電車の中からも、散歩の間にも、京城の自然と街区とを見、日本の文化と朝鮮の文化、この文化の生んだ具体的な生活の種々相を観察し、正直に公平にそれを論議し得たと思ふ。朝鮮を学術的に研究したとはいへなくても、具体的に朝鮮人の生活を静観したものとしては、私の所見は決して軽蔑すべきものではないと信ずる³⁰。

このように、朝鮮滞在している間に書いた随筆は、朝鮮人の生活を静観したものとして決して軽蔑すべきものではないと述べていることから、安倍能成は自ら書いた随筆について少なからぬ誇りを持っていたことがうかがえる。そして、安倍能成はもともと旅行が好きなところもあり、約15年という長い間、朝鮮の様々な場所を見回り、思うことを自由に表現してそれらを随筆の形にした。

それに何といっても他国である朝鮮へ来て、日本と違った国情、人情、風俗、文化に直接して、日本の文化を思ふことも多く、それが具体的な風俗習慣と関聯することの深いことを観て、その形式として学術的な論よりも、思ふことを自由に表現し得る随筆風の文章を書くことが多くなった³¹。

特に安倍能成は、日本とは異なる朝鮮の自然や風俗、文化などに非常に強い興味を示しており、彼の随筆の中には朝鮮の美しさが詩情豊かに描かれている。例えば、朝鮮の金剛山、北漢山、仁王山、南山などの山の風景や、玄海躑躅、くろふねつつじ、連翹、櫻、槐、銀杏、高麗柳などといった朝鮮生殖の植物と巨木、また、京城の城壁、石造の廢墟、南大門、東大門、慶福宮、光化門、亭、瓦屋根、寺などの建築、陶芸品、温突、チゲ³²、服装など、様々な朝鮮の自然や文化がそれに当たる。

その一方、安倍能成は朝鮮の美観にそぐわない日本家屋の乱立や朝鮮に滞在していた日本人の肌の露出、朝鮮の伝統的な建築や城壁などが破壊されることや、朝鮮の地に桜ばかりが植えられることに対しては、日本の特殊な生活様式を朝鮮内に無分別に持ち込む態度を指摘しながら、朝鮮本来の美しさを尊重しなければならないと主張するなど、朝鮮内に無分別に見られる日本人の生活様式などについても考察している。

現代日本の中に存する日本の生活様式には、確かに独特な美点があるが、然しこれは概して或る限られた枠や額縁の中で、その美と面白味とを発揮すべき、小味な細やかなものが多い。しかもその枠より額縁なりは可なり小さい、又その形もやかましい。大きい額縁や形の違った額縁の中へいければ、否更に額縁のない所へ持ってくれば、それは多くの場合妙ないぢけたこせこせしたもの、或は極めて見栄のしない貧弱なものになってしまつて、引立たなくなりがちである、いはゆる日本の様式の生活を朝鮮若くは満蒙の地に移す時、多分にこの感じを抱くものは、独り私ばかりではあるまい³³。

このように、安倍能成は日本の文化を朝鮮に持ち込む際には、慎重に行うべきであると考えており、朝鮮に滞在している日本人が無分別に日本文化を持ち込む行為を警戒していた。

以上から、安倍能成は現実から一步離れて朝鮮を観察することにより、朝鮮の自然や風俗、文化などを高く評価することが可能になったのみならず、朝鮮内に見られる日本人と日本文化についても指摘した安倍能成の業績は、現代の日韓社会の関係を考える上でも決して看過できるものではないだろう。

III. 逃避から理解へ

安倍能成が滞在していた植民地朝鮮では、急速な近代化が推し進められていた。朝鮮の各地に鉄道や路面電車が敷設され、近代的な建物なども次々と建てられると同時に、最先端の服装やファッションなども登場するなど、新しい都市景観が形成された³⁴のである。このような変化は、

人々の生活に大きな影響を与えることになり、朝鮮の京城は近代の都市へとその変貌を遂げていたのである。

しかし、このような急速な変化は、朝鮮の自然の美観を損なう結果ももたらした。

私は今は大部分大京城府の中にはひった京城郊外の、別に何の奇もない、淡々と清らかな風景、小さな砂山に疎らな松が生え、砂川のあたりに藁屋の点在するやうな景色を愛するものであるが、都市の膨脹に拘らずかういふ好ましい味をいくらかでも保存する為には、やはり長い都市計画によって、府がさういふ景勝の地を買収するとか、或は工業区域や住宅区域を適当に指定したりすることを希望したい。これは殆ど空想に近い希望であるかも知れず、又都市の繁栄の為に景色などは問題でないといふかも知れないが、やはりこれだけの大都市になれば、都市全体の美観としての風致区域の保護は、市民の衛生の為に必要であることは固より、市民の真の繁栄の為に止むを得ざる場合の外は、無用にかういふ郊外の美観を傷ける営利的人工を禁止してもらひたいのである³⁵。

このように、1930年代の朝鮮は、日本による植民地支配と、急速な近代化とが相まって朝鮮の自然や都市の美観が損なわれつつある状況であった。それに対して大きな懸念を抱いていた安倍能成は、朝鮮の自然や美観を保存するべきであると日本人々に呼びかけたのである。このような安倍能成の姿勢は、とりわけ朝鮮の建築においてより明白である。

その中南大門は人工を代表するものであるが、この南大門ぐらゐ、街の真中に於いて堂々たる美観を發揮し、李朝の朝鮮を語る記念物はない。ちょうどあの辺が二つの大通の会合する交通の衝に当り、あの偉大な門の存在が交通妨げになるせゐるか、時々この門の破壊又は移転のうはさを耳にするが、これは恐らく訛伝であらう。この門を破壊しない為には、周囲の建築をどのやうに破壊しても改造しても移転しても惜しくはない。門そのものの移転は非常な費用を

要することで問題にはなるまいが、私は京城都市美化の為にいくら莫大の費用を使つても、この南大門の損失を償ふだけのものは、決して作り得ないことを断言する。つまり南大門を破壊するやうなら、都市美化などといふ企は無意味に帰するのである。それだけ南大門の京城に於ける美的価値は大きく、新たに造られる建築の美的文化的価値は乏しい³⁶。

安倍能成は、〈南大門〉を朝鮮の人工物の一つとして認めながらも、朝鮮の街において堂々たる美観を發揮ものとして捉えていたことが見て取れる。当時の南大門は、【図2】のように、朝鮮総督府によって左右の城壁が崩されており、文字通りに、〈門〉のみが残されていた。このような光景を目にし、安倍能成は〈南大門〉にそれ以上の損失があつてならないと強く主張しただけでなく、最終的には〈南大門〉を〈守るべきもの〉として捉えているのである。



【図2】 左右の城壁が崩された南大門³⁷

朝鮮の自然や風俗、文化、建築などに対するこのような安倍能成の姿勢や態度は、決して近代のみに限られるとは言えないだろう。2008年2月、韓国において十分な保安対策が講じられていないまま放置されていた韓国の国宝1号の南大門が、一人の放火犯によって燃やされる事件があった。この悲惨な事件により、約5時間にわたって〈南大門〉が跡形もなく焼失したのだが、このような放火事件からも、植民地支配の時期に粗末に扱われがちであった朝鮮の城壁や南大門などの建築を、〈古くて遅れたもの〉ではなく〈守るべきもの〉として捉え、始終それらを守り、保存しなければならないと主張していた安倍能成の姿勢は、近代

のみならず、現代の韓国社会においても示唆するところが大きいと言える。

植民地支配の時期の朝鮮には多くの日本人が本町という日本人街を形成し、朝鮮で生活しているが日本とあまり変わらない日常を送っていたため、朝鮮文化などについてあまり知らない³⁸日本人も少なからず存在していた。そして、前述したように、当時の日本と日本人は、朝鮮と朝鮮文化を遅れたものと見る見解が支配的であったため、朝鮮文化は単なる〈古くて遅れたもの〉あるいは〈捨てるべきもの〉として認識されがちであった。

その中で安倍能成は、多くの日本人が関心を持たなかった朝鮮の自然や風俗などに目を向け、それらを高く評価した。また、朝鮮文化への理解を深めた安倍能成は、朝鮮文化を〈古くて遅れたもの〉ではなく、〈守るべきもの〉として認識していたため、そのようなことを随筆の形にし、日本と朝鮮の人々に呼びかけたのではないだろうか。



【図3】燃やされる南大門³⁹

安倍能成のこのような姿勢や考え方は、安倍能成とほぼ同時代に朝鮮へ渡り、朝鮮と朝鮮文化を守ろうとした柳宗悦⁴⁰や浅川兄弟（浅川伯教⁴¹、浅川巧⁴²）の朝鮮観とも共通しているといえる。白樺派の一員であり、民芸運動の創始者として知られている柳宗悦、朝鮮の陶磁器に魅かれ、700余りか所の窯址を調査してまとめた⁴³朝鮮陶磁研究家の浅川伯教、そして浅川伯教の弟でありながら朝鮮工芸研究家でもあった浅川巧、この三人の日本人は1924年の朝鮮民族美術館の設立に多大な貢献をしただけでなく、「朝鮮趣味を語る会」（後の「朝鮮工芸会」）などを通じ、朝鮮文化を高く評価したにとどまらず、朝鮮文化の優れた点を

多くの人々に知ってもらうために努力した人物である。朝鮮文化の優れたところを深く理解しており、朝鮮の陶芸などの工芸や美術を高く評価していた柳宗悦や浅川兄弟などと交流をしていた安倍能成は、彼らの影響を受け、朝鮮の自然や文化に目を向けたと捉えることができるだろう。このような点において、安倍能成も、柳宗悦も、そして浅川兄弟も朝鮮文化を高く評価し、守ろうとした数少ない日本人であったという共通点を持っているのである。

しかし安倍能成は、柳宗悦や浅川兄弟から影響を受けたものの、朝鮮を捉える姿勢は決して同一なものではなかった。柳宗悦は「朝鮮人を想ふ」（『読売新聞』1919.5.20 - 24）や「朝鮮の友に贈る書」（『改造』1920.6）などを発表することにより、朝鮮の自由と独立を一貫して主張し、時の日本当局の植民地・同化政策を公然かつ大胆に批判し続けた⁴⁴。そして、当時の多くの日本知識人に朝鮮と朝鮮問題を呼びかけたのである。つまり柳は、当時の日本の治政下において、「発言の自由を持たなかった人々」の代弁者として、これらの人々の心情を理解し、「誤れる日本」を批判し続けたのである⁴⁵。このような柳宗悦の行動は、当時の多くの日本知識人にはできなかった、日本による朝鮮の植民地支配への抵抗を示したものであると捉えられる。また、柳宗悦は講演会や音楽会、展覧会の開催、及び美術館の設立などを通じ、日本人と朝鮮人が互いを理解し、わかり合う場を作ろうとした、実践的行動人として知られている⁴⁶。当時の日本人にとって朝鮮は、自分たちの生活や利益、研究など、あるいは退屈を紛らすための場所であり、朝鮮や朝鮮の文化、歴史、さらにはそれらを創った人々と交流するための場所ではなかった⁴⁷ことを考慮すれば、柳宗悦がいかに当時の日本知識人と異なっていたかがうかがえる。

浅川巧も、柳宗悦と同様に朝鮮人の生活に親しみ、文化を研究し、『朝鮮の膳』（1929）、『朝鮮陶磁名考』（1931）などを著わすなど、特にその工芸品に対する鑑賞と研究とに詳しい人物であった。浅川巧の優しい目は、単に風物に向けられただけでなく、ごく普通の朝鮮人に対しても向けられ、常に虐げられた朝鮮人の味方であった⁴⁸。これについては、浅川巧の死後、普段から親しんで

いた多くの朝鮮人がその棺を担ぐことを希望し、朝鮮の歌を歌いながらその棺を埋めた⁴⁹ ことから見て取れるだろう。

しかし、安倍能成は柳宗悦と浅川兄弟とは異なった。安倍能成は、柳宗悦と浅川兄弟と交流を結びながらも、「内地人が朝鮮人を愛することは、いくら感傷的な人道主義者にとっても、抽象的な自由主義者にとっても難しい⁵⁰」ことであると言及したが、それは、つまり、彼自身には朝鮮人を愛することはできなかつたという一種の告白だったのである。実際、安倍能成の随筆の中に描写されている朝鮮人のイメージは、決して良いものとはいえない。

一体朝鮮人の持って居る長所はどこにあるかは、私が朝鮮へ来てから絶えず注意もし、人にも聞いて居ることであるが、私の為に朝鮮人の長所を語ってくれる人も少く、私自身も未だ十分にこれを発見するに至らない⁵¹。

安倍能成は、京城帝国大学の学生以外の朝鮮人との交流はほとんど持たなかつたことや、現実から逃避するために朝鮮の自然や風俗などに目を向けたことから、柳宗悦や浅川兄弟と比べ、非常に消極的な姿勢で朝鮮を理解しようとしていたことがわかる。このような点において、安倍能成は朝鮮と朝鮮人をより深いところまで理解することはできず、不完全な理解にとどまっているといえるのではないだろうか。

おわりに

以上、約 15 年の朝鮮滞在期における安倍能成について述べてきたが、朝鮮に滞在していた安倍能成は、常に〈矛盾〉〈逃避〉〈理解〉の 3 つの側面を併せ持っていたことが明らかになった。これらの 3 つの側面は、それぞれが独立しているわけではなく、朝鮮滞在期の安倍能成の内面に常に重なり合い、影響を与え合っていたといっても過言ではないだろう。つまり、一人の教育者でありながら植民地支配者側の日本知識人として矛盾に悩まされた安倍能成は、強圧的な植民地支配が行われていた朝鮮という現実から逃避するため、「観の世界」を追求することにより、朝鮮の自然や風

俗、文化などに目を向けた。その結果、安倍能成は単に日本と日本文化がすべての側面において優越だという立場をとらず、現実から一歩離れることによって当時の朝鮮を客観かつ相対的に眺めることができたのである。そうすることにより、朝鮮の自然や風俗、文化などへの理解を深めることができた安倍能成は、〈古くて遅れたもの〉として認識されがちであった朝鮮文化を高く評価しただけでなく、損なわれつつあった朝鮮の景色や美観に対しては、〈守るべきもの〉として捉えており、それらを保存すべきであると日本と朝鮮の人々に呼びかけたのである。

安倍能成が約 15 年という長い期間を朝鮮に滞在しながら書き残した 6 冊の随筆集には、常にそれらのことが底辺に流れているといえる。このような安倍能成の業績は、たとえ逃避から獲得した結果、あるいは不完全な理解にとどまっているものであるとしても、決して看過してよいものではない。そういう意味で、安倍能成が追求した「観の世界」の「観」は、単に植民地支配を受けていた朝鮮社会を傍観するための「観」であるだけでなく、近代朝鮮を静観するための「観」、すなわち当時の朝鮮社会をより深く理解するための「観」でもあったことは言うまでもないだろう。

¹ 随筆の中には、朝鮮のみならず、中国や日本、ヨーロッパなどの自然、文化、交流関係、書物への感想なども書かれている。

² 崔 (2004) 211 頁。

³ 丁 (2003) 1 頁。

⁴ 同上、11 頁。

⁵ 丁 (2002) 29 - 32 頁。

⁶ 安倍 (1926) 17 頁。

⁷ 李・崔 (2013) 4 頁。

⁸ 同上、253 頁。

⁹ 同上、175 頁。

¹⁰ 同上、204 頁。

¹¹ 同上。

¹² 安倍 (1926) 13 - 14 頁。

¹³ 安倍 (1948) 182 頁。

¹⁴ 安倍 (1932) 82 頁。

¹⁵ 安倍 (1948) 183 - 184 頁。

¹⁶ 佐野 (2006) 69 頁。

¹⁷ 趙 (2013) 187 頁。

¹⁸ 佐野 (2006) 69 - 70 頁。

¹⁹ 同上。

²⁰ 趙 (2013) 196 頁。

²¹ 佐野 (2006) 66 頁。

²² 水野 (2008) 104 頁。

- ²³ 同上、50 頁。
²⁴ 安倍 (1938) 449 - 450 頁。
²⁵ 同上、355 頁。
²⁶ 安倍 (1936) 121 頁。
²⁷ 安倍 (1932) 4 頁。
²⁸ 安倍能成『青丘雑記』(岩波書店、1932)、安倍能成『静夜集』(岩波書店、1934)、安倍能成『草野集』(岩波書店、1936)、安倍能成『朝暮抄』(岩波書店、1938)、安倍能成『自然・人間・書物』(岩波書店、1942)、安倍能成『権域抄』(斎藤書店、1947)がある。
²⁹ 安倍 (1938) 1 - 2 頁。
³⁰ 安倍 (1966) 564 頁。
³¹ 同上、557 頁。
³² 様々な荷物を運ぶ際に使われる運搬道具。
³³ 安倍 (1932) 333 - 334 頁。
³⁴ 橋谷 (2004) 147 頁。
³⁵ 安倍 (1942) 18 頁。
³⁶ 同上、16 - 17 頁。
³⁷ ソウル特別市庁 (2014) 78 頁。
³⁸ 榛葉 (1987) 124 頁。
³⁹ 「崇禮門の全焼、崩壊…国宝1号を失った」(『東亜日報』2008年2月11日付)
<http://news.donga.com/3/all/20080211/8542636/1> (2015年10月10日検索)
⁴⁰ 宗教哲学者。朝鮮美術工芸研究者。1916年、はじめて朝鮮を旅行し、その美術に驚嘆し、以後、約20回朝鮮を訪問した。朝鮮美術への思慕をつづった文章に「石仏寺の彫刻に就て」「朝鮮の美術」などがある。柳の特色は、朝鮮への関心を、自分の専門領域である美術工芸にとどめないで、その背後にある民族の運命にまで及ぼした点にある。1919年の3・1運動に際して発表された「朝鮮人を思ふ」は、日本による朝鮮同化政策を恐るべきこととし、こうしたことがつづくなら、独立が彼ら朝鮮人の理想となるのは必然の結果であろうと書いている。1920年、朝鮮旅行に先立って書かれた「朝鮮の友に贈る書」は、日本の不正を糾弾し、朝鮮人へ連帯の意志を表わした文章であるが、官憲によって伏字だらけにさせられた。韓国においても彼に対する評価は高く、韓国政府からは文化勲章が授与された。
⁴¹ 朝鮮陶磁研究者。朝鮮陶磁器の研究などにより、「朝鮮陶磁の神様」という異名を与えられた。柳宗悦とは弟巧と共に生涯親交を結んだ。
⁴² 朝鮮林業試験場技手、朝鮮工芸研究者。1914年に朝鮮へ渡り、朝鮮林業試験場に勤務することになった。1924年には柳宗悦とはかつて、京城に朝鮮民族美術館を設立した。その後『朝鮮の膳』『朝鮮陶磁名考』を著わした。職場の朝鮮人のよい友人であったため、死後、二度にわたって、朝鮮人によって浅川追慕の碑が建てられた。
⁴³ 高崎 (2002) 131 頁。
⁴⁴ 韓 (2008) 5 頁。
⁴⁵ 同上、7 頁。
⁴⁶ 丁 (2003) 9 頁。
⁴⁷ 同上、7 頁。
⁴⁸ 高崎 (1998) 146 - 147 頁。
⁴⁹ 安倍 (1932) 295 頁。
⁵⁰ 同上、293 頁。
⁵¹ 安倍 (1934) 143 頁。

参考文献

〈日本語〉

- 安倍能成 (1926) 「京城帝国大學に寄する希望」『文教の朝鮮』6号、朝鮮教育会、13 - 17 頁。
 ——— (1932) 『青丘雑記』岩波書店
 ——— (1934) 『静夜集』岩波書店
 ——— (1936) 『草野集』岩波書店
 ——— (1938) 『朝暮抄』岩波書店
 ——— (1942) 『自然・人間・書物』岩波書店
 ——— (1947) 『権域抄』斎藤書店
 ——— (1948) 『一日本人として』白日書院
 ——— (1966) 『我が生ひ立ち』岩波書店
 佐野通夫 (2006) 『日本植民地教育の展開と朝鮮民衆の対応』社会評論社
 榛葉梨花 (1987) 「安倍能成の朝鮮観」『季刊三千里』50号、三千里社、120 - 127 頁。
 高崎宗司 (1995) 「韓国ゆかりの日本人」(木村誠外編『朝鮮人物事典』大和書房) 238 - 240 頁。
 ——— (1998) 『朝鮮の土となった日本人 - 浅川巧の生涯』草風館
 ——— (2002) 『植民地朝鮮の日本人』岩波書店
 丁貴連 (2003) 「もう一つの旅行記 - 柳宗悦の朝鮮紀行をめぐる」『宇都宮大学国際学部研究論集』15号、宇都宮大学国際学部、1-14 頁。
 趙景達 (2013) 『植民地朝鮮と日本』岩波書店
 橋谷弘 (2004) 『帝国日本と植民地都市』吉川弘文館
 韓永大 (2008) 『柳宗悦と朝鮮 - 自由と芸術への献身』明石書店
 水野直樹 (2008) 『創氏改名 - 日本の朝鮮支配の中で』岩波書店
 〈韓国語〉
 李忠雨・崔鍾庫 (2013) 『(再び見る) 京城帝国大学』プルンササン
 ソウル特別市庁 (2014) 『ソウル視・空間の誕生：漢城、京城、ソウル』ソウル特別市文化芸術課
 崔在喆 (2004) 「近代日本人の韓国見聞記研究 - 安倍能成の『青丘雑記』を中心に」『外国文学研究』16号、韓国外国語大学校外国文学研究所、209 - 225 頁。

丁仙伊（2002）『京城帝国大学の研究』文音社
「崇禮門の全焼、崩壊…国宝1号を失った」
（『東亜日報』2008年2月11日付）<http://news.donga.com/3/all/20080211/8542636/1>
（2015年10月10日検索）

謝辞

本稿の執筆にあたり、指導教員の丁貴連先生から始終厚いご指導をいただきました。この場を借りて深く御礼申し上げます。また、有益なご意見とご協力を頂いた副指導教員の今井直先生、田巻松雄先生にも心より感謝の意を表します。最後に、有益なご意見をくださった丁研究室の先輩、後輩にも感謝いたします。

아베 요시시게와 조선

- 모순과 도피 사이에서 -

Abe Yoshishige and Colonial Korea

—Between Contradiction and Escape—

金 光 一

(KIM Kwangil)

< 요지 >

1926년부터 1940년까지, 경성제국대학의 교수로서 모순을 가지고 있었던 아베 요시시게는, 강압적인 식민지 지배가 행해지고 있었던 조선이라는 현실로부터 도피하기 위해 조선의 자연과 풍습, 문화 등으로 눈을 돌렸다. 그 결과, 아베 요시시게는 단순히 일본과 일본문화만이 모든 측면에서 우월하다는 입장에서 벗어나, 현실로부터 한 발자국 떨어짐으로써 당시의 조선을 객관적 그리고 상대적으로 바라보는 것이 가능했다. 그로 인해, 조선문화를 깊이 이해할 수 있었던 아베 요시시게는 <오래되고 뒤쳐진 것>으로써 인식되고 있었던 조선문화를 높게 평가할 수 있었을 뿐만 아니라, 조선문화를 <지켜야 할 것>으로써 판단하여 언제나 그것들을 보존해야 한다고 일본과 조선 사람들에게 호소한 것이다.

본고에서는, 조선체제기의 아베 요시시게에 주목하여 조선에 체재하고 있었던 아베 요시시게가 어떠한 갈등과 모순을 내포하고 있었는지, 또 어떠한 자세와 태도로 조선을 바라보고 있었는지를 고찰하였다.

(2015年 11月 2日受理)